町医者だより

平成26年06月号

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
２分ミスタードーナツ並び
ヘアサロンAsh向かいビル2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器科

軽症喘息

今年の3月9日は日曜日でした。その日は朝から気が重くため息ばかりついていました。というのも喘息の吸入薬を出しているA社がその本社で行う「Meet the Specialist in Tokyo」なる外人さんの話を聞くという会に出席しませんか、とのお誘いを受けて、承諾してしまったからです。承諾した後に話をよく聞いてみたら全国から呼吸器科医が10名ほどが招かれて外国の先生の話を聞く、との事。そんな少人数で、それも講演してくださる先生はドイツ人のBuhl先生という全く知らない先生。せっかくだからと指定の会場に重い足取りで向かいました。しかしながら、ここで思わぬ収穫がありました。今回はその話をさせていただきます。

会場に行くと楕円形の机があって10名くらいが座って会議をするような形態になっていました。程なくして座長の女子医大の玉置教授に伴われてBuhl先生が着席され、会が始まりました。同時通訳のレシーバーがありそれを使用しても良かったのですが、Buhl先生がゆっくりした英語で話してくれたため途中からレシーバーは使用しませんでした。冒頭はA社の吸入薬を評価した臨床研究の論文の話でしたが、実際の診察で、これは日本と同様ですが、ドイツでも喘息の患者さんがなかなか吸入薬を継続してくれないことや、呼吸器専門医があまり呼吸機能検査をやらないことを正直に話してくれました。呼吸機能検査をあまりやらないということは以前の町医者だより(平成24年5月号　喘息の診断と呼吸機能検査)でも取り上げましたが、カナダでも呼吸機能検査をあまり行っておらず結局喘息のフォローを患者の症状だけで行っているようでそれは問題だと思います。良い機会だと思ってかねてから海外の呼吸器科医に聞いてみたいと思っていいた事を質問させていただきました。一つは現在患者さんに処方しているシムビコートやアドエアなどにも入っているLABAと略している長時間作用型ベーター2気管支拡張剤の安全性についてです。私も問題ないと考えていますが、なぜかアメリカだけがLABAの安全性に懸念を今でも持っています(以前の町医者だより平成22年5月号に取り上げています)。LABAが喘息の悪化させるとの懸念です。Buhl先生は、このように答えていました。「ヨーロッパでもそうですが、日本ではどうでしょうか？　LABAの使用で実際に喘息が悪化したりしたことはありますか？　無いですよね。喘息の悪化を引き起こしているとは考えられません」との事でした。次に、どなたかの後に質問しました。それは外来等の臨床の場で「咳喘息」という診断名をどれくらいの頻度で使用するかということです。それに対する答えは、「全く使用しない」という答えでした。さらに、「軽症喘息との診断でよいのではないか」と追加していました。座長をされていた玉置教授も「軽症喘息」でよいのではないかと賛同していました。嬉しかったです。以前からこの町医者だよりでもたびたび取り上げてきましたが(平成20年3月号、22年11月号、25年3月号)、「咳喘息」という診断名は日本と中国くらいでしか使用されていないこと、咳喘息も喘息で区別することは全く意味ないとの意見を述べてきました(これまでも、そしてこれからも当院では「咳喘息」との診断名を使用することはありません)。長年アメリカやヨーロッパの先生に聞いてみたいとい希望がかないました。
実は会の途中から、Buhl先生と私が同じアメリカの先生のところに留学していたことが分かってきました(場所や時期は異なります)。なんと言う偶然。会が終わって、立ち話をさせていただいたのですが、そこでも「喘息は多種多様な病態の集団なのだから、咳喘息という診断名を使用する意味はない」と話していました。日本人の知り合いも多く、以前、日本呼吸器学会の会長をされていた東北大学の貫和先生のメールアドレスを知りたいということだったので、その連絡を貫和先生に入れたところ、Buhl先生はヨーロッパ呼吸器学会のこれからを担っていくリーダー的な先生だと教えてくれました。そんな偉い先生だったとは・・・・。
不思議な縁を感じる実りある1日でした。